

論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科

文化科学専攻生活健康科学プログラム

2015年度入学

(学生番号) 151-700002-8

ふりがな たけむら ゆみ
(氏名) 武村 由美

1. 論文題目

中山間地域に暮らす高齢女性の生活の変遷に関する研究

— 過疎化する高知県仁淀川町 T 地域を事例に —

2. 論文要旨

【研究の目的】

本研究は、中山間地域に暮らす高齢女性の生活の変遷を明らかにし、過疎地域のゆく手に現われる限界集落に着目し、そこに暮らしてきた後期高齢女性の半生から限界集落化のプロセスを明らかにすることを目的とする。

【研究の方法】

調査対象地域として高知県仁淀川町 T 集落を選定し、過疎化と限界集落化のプロセスを、①地域変動のプロセスと②高齢女性のライフヒストリーの両面から明らかにする。①に関してはマクロな統計データを利用するとともに、高知県、

仁淀川町の行政資料等を収集し、歴史的変遷を辿った。②の方法論は、住民のライフストーリーに関する口述記録をもとに 8 人の女性の生活の変化を日本全体の社会変動と地域社会の変動との関連でみてゆくもので、既存の限界集落研究には見られないものである。

【研究の背景】

わが国の中山間地域では、人口減少と高齢化によって集落維持が困難となった限界集落問題が顕在化しているが、その発端は、高度経済成長期に始まる過疎化にある。過疎化の影響は、産業構造の変化や、近代化、都市化による家族構造と生活様式の変化として現れ、地域構造や生活を大きく変容させた。そして、高度経済成長期に地域に残った人々が高齢化し、単身高齢者世帯が増加するなか、都市部で暮らす子どもの元へと呼び寄せられる高齢者の増加が注目されるようになった。これら種々の現象が相互に作用し、共鳴しながら不断の変化を遂げ、現在の限界集落問題へと進展してきたものであると考える。そこで、本研究は、中山間地域で暮らしてきた 8 人の女性たちの生活の変遷から、地域社会の変容を捉え直そうとするものである。

【論文の構成とまとめ】

序章では、研究目的と意図、研究の方法、研究の背景を述べ、関連する先行研究から、問題意識は①少子化と多死社会を迎えたことによる人口減少、②過疎化と限界集落化による地域社会の変容、③高齢者の単身世帯化と家族の変容にあると定めた。

第 I 部では、中山間地の過疎化に関する先行研究と統計データに加え、高知県と仁淀川町の行政資料や史料を集め、高度経済成長期以降を 10 年毎に区分して

地域社会の変化を追った。

高度経済成長期の社会経済的圧力は、仁淀川町の産業構造を大きく突き崩し、過疎化を生んだ。過疎地域の貧困の解消のために、1960年代から切れ目なく特別法の制定や優遇政策がとられてきたが、仁淀川町の過疎を止めることはできなかった。そして、わが国の人口が減少するなか、人口と財政力を基準とする法制度によって過疎地域は拡大しているが、過疎問題は、貧困問題から住民の価値観の問題へと移行しているように思われる。

第Ⅱ部では、仁淀川町T地域の3つの集落で暮らす8人の後期高齢女性の口述記録から彼女たちの生活の変容を捉えた。

彼女たちのライフコース上の経験や生き方によって「農民型」と「非農民型」の2つのタイプに分類して検討した。

「農民型」は、別居隠居制により家を継承し、「非農民型」は、子ども数3～4人の核家族を形成した。しかし、「農民型」「非農民型」に関わらず、子どもたちを高校へ進学させたことで夫婦二人の生活へと移行し、家族は広域化した。そして、夫婦二人の生活が始まってからおよそ30年間で全員がひとり暮らしへと移行した。

ひとり暮らしになった現在、二つのグループは、過去の生活の違いから現在の生活のどこに価値を見るかが明らかに異なるように見える。「農民型」の女性たちは社会情勢とともに急激に変遷した地域で時代に対応しながら現在まで自分の農地で作業を続けられることに価値を見いたしている。一方「非農村型」の女性たちは、郵便、電話の通信手段や洋裁、編み物など地域に新しい技術を広めた人たちである。高齢期でも続けられる価値ある何かができる環境を整えることが必要であることが示唆された。

第Ⅲ部では、8人の女性の後期高齢期における生活実態と仁淀川町の聞き取り調査をもとに生活上の移行と今後の課題について検討した。

フォーマルサポートの実態についてみると、仁淀川町 T 地域では、すでに地域包括ケアシステムは形骸化している。T 地域のような医療・介護システムが広域化している過疎地では地域包括ケアシステムの適用は難しく、それは構造的な問題である。

8 人の女性たちは、医療施設や介護サービスが整備される以前からこの地域で暮らし、病気や寝たきりになると地域から離れていった人たちを見てきている。そしてこのような地域環境を前提として、やがては住み慣れた自宅を離れざるを得ない時がくることも与件として受け入れていた。

そして、最終局面の生活の移行については、自立している段階の生活形態である程度類推できることを示したが、フォーマルサポートを利用する生活への移行は別居子が決定する場合も少なくない。自治体は、早い段階で高齢者だけでなく家族・親族との接点を持ち、地域のサポート等の情報を伝える必要がある。

第Ⅳ部では、T 地域の 3 つの集落のうち最も小規模で、高齢化率 100% の限界集落である A 集落がどのようなプロセスを経て限界集落へと移行したのかを A 集落で暮らす 2 人の女性の生活の変遷を通して明らかにした。

高度経済成長期以降、集落は人口再生産機能を失い、親族の広域化によって、「介護」という役割の継承、家産の継承、さらには先祖代々の墓の継承といった旧来の家族制度が機能しなくなった。そして、集落は住民の高齢化とともに従来集落が持っていた近隣の相互扶助が機能しなくなり集落機能を喪失した

第Ⅴ部では、A 集落で暮らすひとりの女性のライフヒストリーを通じて、限界集落で暮らす高齢女性の生活の変遷をみた。

高度経済成長期の経済的圧力は A 集落に過疎化という社会現象を引き起こし、集落の農林業を衰退させ、家族を広域化したが、一方で、住民を過酷な労働から解放し、生活を豊かにし、子どもたちに教育の機会を与えた。

子どもたちが地域に戻らなかったことでアトツギを確保できなかった梅子さ

ん夫婦は隠居をせずに働き続けたが、高齢化とともに田畑、山林は徐々に放置されていった。

梅子さんの親世代が隠居した時には、近隣に本家、分家の子世帯があり、老親が支援を必要とすれば、本家、分家で話し合い、ホームヘルパーのような形態で各家庭から人手を派遣していた。しかし、梅子さんの親族は近隣にはおらず、代替的な役割を果たしているのが、福祉サービスである。

高齢期のセーフティ・ネットとして機能してきた家族は離れて暮らしている。ケアをシェアするためには、人と人とのつながり、関係性、コミュニティを再構築することが不可欠の条件となる。「最期まで自宅で暮らす」ことを可能にするためには、梅子さんの両親を支えた親族に代わるものを制度とすることが望まれる。

【結論】

① T 地域の過疎化と限界集落化の過去から現在までのプロセスを明らかにした。

高度経済成長期に地域の人口構造バランスは大きく崩れたが、山林田畑は跡継ぎに継承されないまま地域に残った昭和一桁世代によって保全され、地域は人口に大きな変動のない定常期を迎える。そして、昭和一桁世代が高齢期を迎えた 2000 年頃から再び人口減少がはじまった。この頃地域の周縁部にある小規模集落は、徐々に相互扶助機能を失い限界集落へと移行した。

② 別居隠居制をとってきたこの地方で、それがいつどのようなプロセスを経て崩れ、家族の継承ができなくなったのかを明らかにした。

高度経済成長期に、都市部で教育機会や仕事を得た子世代は、1970 年代に都市で就職し、地域に戻ることなく都市部で家庭を築いた。その結果、「家」の継承は行われず、親世代は隠居をせず山林・田畑を維持してきた

が、高齢化により徐々に放置されていった。

- ③ 過疎化する集落の高齢女性はなぜ一人暮らしができるのか、何が生活を支えているのかを明らかにした。

8人の女性たちは、貧しい時代にやりくりをして子供を進学させ、家産を築いており、少ない年金でも収入の範囲内でやりくりをして家計を営み、自分でできないことは、親族や近隣の支援を受け、さらに公的機関が提供する必要なサービスを利用しながら、できる限り自立した生活を続けようとしていた。

- ④ 過疎化する集落の高齢女性の QOL を測定し、どのような要因に規定されているのかを検討した。

主観的 QOL を高める要因には、「農民型」の人たちは農作業が生きる意欲につながる「生きがい」であり、「非農民型」の人たちは日常的にはおしゃべりを楽しんでいるが、おしゃべりは生きがいにつながるとも言えなかった。一方、主観的 QOL が低くなる要因には「主観的健康感」が影響することが確認できた。

- ⑤ 過疎化する集落の高齢者、とくに限界集落の高齢者はどのようなプロセスを経て最期を迎えるのか、そのプロセスを明らかにした。

別居隠居制は、高齢期の独居期間を子供の近居によって支えられていた。しかし、家族が広域化した結果、緊急時の対応が困難となり、遠居する別居子は「呼び寄せ」など数年をかけて試すが、高齢者自身は最後まで地域で暮らすことを望み、いずれは自宅を離れ介護施設へ入所することも与件として受け入れている。高齢者が地域に住み続けるためには家族に代わる支援の提供者が必要である。この新しい近隣関係を促進するために、自治体は様々な

情報や公的支援を提供することが今後の課題と考えられる。

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Yumi Takemura

1. Title

Rural Depopulation and Changes in the Lives of Old Women in Farming
Communities

In the case of the Region T of Niyodogawa in the Prefecture of Kochi

2. Summary of the Study

Aims of the study

This study aims to gain a new insight into the phenomenon of *terminal decline** by focusing on the lives of women aged over 75 who have lived all their adult lives in these rural farming communities.

***The state of a community in which 50% of its population is aged 65 or over and as the result its function as a social organism has ceased.*

Research method

For this study, the Region T of Nyodogawa, in the prefecture of Kochi was selected. How the communities in the region underwent the population loss, in one case to the extent of reaching at the point of *terminal decline*, was considered in the context of the changes in the communities on the whole and in particular in context of the changes in the lives of women who have lived

in the communities all or almost all their lives. The relevant statistics were collected and the administrative record of Niyodogawa and its historical reference were reviewed. As for women's lives, eight women from the communities were interviewed and the transcription was analysed. A study that focuses on old women and their lives in the context of the profound changes not only in rural communities but also in Japanese society in general is assumed to be the first undertaking in the field.

Backgrounds of the study

Depopulation and aging population in rural farming communities in recent years have resulted in many of these communities to become *terminally declined*. The cause of the depopulation is generally believed to have originated in the economic boom in the 1960s to 1970s when rural communities lost a large proportion of their population to industrialised cities. Apart from the loss of population, the impact of the economic boom manifested in a number of ways: the development such as building new roads in the nearby area turned the farmers into labourers and with it consumerism entered the communities. This inevitably had impact on the traditional way of living and family structure. It can be said that depopulation has recurred in recent years, as those who remained in the communities during the first phase of population loss are now old and many are leaving the communities to live with their children in cities. It can be concluded that the phenomenon of *terminal decline* is the culmination of many decades of changes referred above. This study attempts to gain a new insight into the changes and their impact on the communities from the personal experience of eight women who have lived all or almost all their lives in these communities.

Structure of the Study and Summaries of Each Part

Introduction: The aim of the study, the research method, and the backgrounds of the study are presented and the three issues on which the study focuses are stated. They are: the decline of population as the result of low birth rate and high death rate; the effects of depopulation and *terminal decline*; and lives of old women living alone as the result of changing family structure.

Part I: Literature review is carried out on the existing studies of depopulation in rural communities, and the relevant statistics are reviewed. Administrative data and historical records of the prefecture of Kochi and the district of Niyodogawa are collected and examined in order to understand the way in which the rural communities have changed. The study examines decade by decade the social changes in the communities after the economic boom in the 1960s.

Social and economic pressures created by the economic boom profoundly changed the inhabitants' livelihood in Niyodogawa which led to extensive depopulation in the area. Whilst various national policies were implemented in order to prevent further depopulation of rural communities in general, Niyodogawa continued to lose its population. Communities classified as depopulated areas have been steadily increasing in number partly because the population of the nation as a whole has been sharply declining in the last few decades. Taking these facts into consideration, this study focuses not on the population loss and rural poverty of which extensive studies already exist. Instead this study focuses on the perceptions of the

inhabitants about the values they find in their lives.

Part II: Eight women aged 75 and over from three communities in the Region T in Nitoyogawa were interviewed. The transcription was analysed and the changes in their lives were identified. The women were divided into two groups according to their life experiences: traditional rural family type and non-traditional type (hereafter these will be referred to as traditional group and non-traditional group).

The women in traditional group spent their lives working on the land of their husbands' family and followed the traditional, family oriented lives. The women in non-traditional group, on the other hand, had no involvement with the works of the land of their parents-in-law. Instead, they introduced new business and created employment opportunities in the communities. Despite these differences, the women in both groups are now all living alone.

Notwithstanding the similarity in their current situation, the women in the two groups demonstrated significant differences in their perceptions of quality of life. The women in traditional group have lived through profound changes in the trend in agriculture and had to overcome various financial difficulties many of which were the effects of the changes. Yet despite the hardship, they value the fact that they have managed to preserve their land and are still able to continue their works. The women in non-traditional group, on the other hand, seem to show more interest in fulfilment in life by maintaining wider social contacts and close relationships with their neighbours and acquaintances. It can be speculated that their perceptions are borne out of their experience of being what might be called *entrepreneur* and their involvement in wider

social activities than those of the women in traditional group experienced during their working lives.

Part Three: Along with the eight women, relevant Niyodogawa district officials and specialists are interviewed. The information collected is analysed and in what way the women's lives have changed, what problems might lay ahead, and what solutions might be available are discussed.

Although public care system exists, the eight women are aware that the system does not function well in rural communities like the district T in Niyodogawa where they live. They remember the time when the system did not exist and old people simply left the communities if they became ill or in need of care. The women anticipate that it is more than likely that this is what will happen to them when their time comes.

Taking into consideration that the women accept the likelihood of their moving into a care home in the last days of their lives, it is important for their families to have a long-term plan in place. For the plan to work as it meant to do, the local authority for their part needs to make available the relevant information, support, and advice. These preparations will help to make the women's last change in their lives less problematic if executed effectively.

Part IV: This part of the study focuses on the Village A, the smallest of the three communities in the Region T which is now in the state of *terminal decline*. Two women's lives were studied and considered in what way the

process of the community becoming the state of *terminal decline* manifested throughout their lives.

During the economic boom in the 1960s, a large number of young people left rural communities which led to substantial fall in the birthrate and profound changes in family structures in the area. The loss of carers within the family, the lack of family member who would inherit the property, and the discontinuation of the ritual of maintaining family graves were some of the notable traditions that were lost. As the inhabitants age, what is left of the traditions such as mutual support within the neighbourhood has now become dysfunctional.

Part V: By listening to the life of one woman from the Village A, this part of study examines in detail in what way the lives of women have been affected by the changes that had occurred throughout their lives.

As in many rural communities, the economic boom in the 1960s caused depopulation in the community A resulting in the decline of its forestry and farming industry and loss of traditional family structures. On the other hand, it offered a new livelihood that freed the people from physical hard labours on the land. It also enabled them to educate their children.

In the case of Umeko and her husband, since their children did not return to the community, the couple continued to work on the land until they were too old for the physical labour that the work involved. Inevitably, the land became

gradually neglected.

When Umeko's parents' generation retired from the farming, they had their children living nearby who would arrange the care tasks amongst themselves when their parents required support as care workers in modern systems will do. Umeko had expected the same arrangement for herself in her old age yet none of her family members live close enough to take up such a role. Instead, she is relying on social services.

In many rural communities nationwide, a family tends to continue by the eldest son staying with his parents when he marries even if he is not involved in farming. In these communities, the parents are usually cared within the family until their last days or until they need institutional care. In other words, old women living alone, as they do in the communities that are the subject of this study can be seen as a relatively unique phenomenon. It can be understood as the result of the particular housing arrangement in families that has been the tradition in these communities. Based on this understanding, this study suggests that a new concept of communal support needs to be introduced in which social services and other relevant organisations play an active role in establishing a workable care system in order to regenerate a community based care system for their elderly inhabitants.

Conclusion

1

The study has established how depopulation and *terminal decline* of the communities in the Region T began and how they have progressed up to the present time

As the result of the economic boom in the 1960s, the population in these rural communities declined sharply but the works on the land were maintained by the older generation that remained in the area. The population stayed stable until around the year 2000 when those who remained in the communities began to die. Their deaths in turn led to the lose of the communities' traditional functions. This point is generally considered to be the beginning of *terminal decline*.

2

The study has identified various factors that caused the decline of the housing arrangement of families that is unique to this region.

As has been discussed, the decisive turning point in the communities was the economic boom during which a substantial proportion of young people left the communities. Most of them settled in towns and did not return. Thus family continuation withing the communities came to a halt and although their parents continued to work on the land, as they aged, the land became increasingly neglected.

3

The study has identified the factors that enable the old women in these depopulated communities to live alone. The women's own perceptions about the values in their lives have also been identified.

Whether their lives have been traditional or not so traditional, these eight women have all overcome many difficulties including financial hardship in their lives. In their old age, despite the decline of many traditions that aided previous generations, they demonstrate ability to maintain independent living by making use of available resources such as help from the family and neighbours if possible, using available social services, and being financially prudent with their pensions.

4

Quality of life of old women in these depopulating, rural communities was measured and the influencing factors were identified.

The women in traditional group are content with their lives in the communities as long as they are physically fit enough to be able to continue working on the land. The women in non-traditional group have no specific complaints but appear to have less positive attitude towards their current lives: they are satisfied as long as they are able to maintain certain degree of social life.

5

5. This study began by aiming to understand the live experiences of women who had lived all their adult lives in depopulated rural areas, and their perceptions of values in their current lives. It has found that the women in traditional group value the fact that they are still able to work on their land yet are anxious about the time when they are no longer physically fit. The women in non-traditional group enjoy socialising with friends and neighbors but do not seem to see this as exactly the essential value in their lives.

On the basis of these findings, this study suggests that in order to improve lives of old women in these rural, depopulated communities, long-term, innovative policies need to be put into place. These policies should enable the women in traditional group to continue their work in various degrees as long as they wish to work. For the women in non-traditional group, the policies should offer opportunities for them to use their experiences in business and other non-agricultural works that will benefit the communities. The study also suggests that since most women in these communities today spend their working lives outside agriculture, these policies will have far-reaching and positive effects in the future of these depopulated rural communities.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者

放送大学大学院 文化科学研究科 文化科学専攻

生活健康科学プログラム

氏名 武村 由美

論文題目

中山間地に暮らす高齢女性の生活の変遷に関する研究

——過疎化する高知県仁淀川町T地域を事例に——

審査委員名簿

- ・主査（放送大学教授 博士（社会科学）） 下夷 美幸
- ・副査（放送大学客員教授 社会学博士） 宮本 みち子
- ・副査（放送大学教授 博士（学術）） 山田 知子
- ・副査（慶應義塾大学名誉教授 工学博士） 大江 守之

論文審査及び試験の結果

本研究は、過疎化する中山間地が限界集落化する歴史過程を、そこに暮らす後期高齢女性たちの生活の変遷から明らかにすることを目的としている。調査対象地域として高知県仁淀川町 T 集落を選定した。調査地の過疎化の歴史過程に関してはマクロな統計データを利用するとともに、高知県、仁淀川町の行政資料等を収集し、歴史的変遷を辿っている。現地における実査で得られた女性高齢者のライフヒストリーに関する口述記録をもとに 8 人の女性の生活の変容から日本全体の社会変動と地域社会の変動をみてゆくものである。

論文の構成をみると、第Ⅰ部では、中山間地の過疎化に関する理論と歴史をおさえ、高知県と仁淀川町の社会変動と人口・世帯変動を整理している。第Ⅱ部では、仁淀川町 T 地域の 3 つの集落で暮らす 8 人の後期高齢女性の口述記録から彼女たちの生活の変容を捉え、過疎化のプロセスとの関連性を明らかにしようとした。第Ⅲ部では、第Ⅱ部で対象とした 8 人の生活実態と仁淀川町の聞き取り調査をもとに生活の変遷と今後の課題を検討している。第Ⅳ部では、T 地域の 3 つの集落のうち最も小規模で高齢化率 100% の限界集落である A 集落がどのようなプロセスを経て限界集落へと移行したかをまとめている。第Ⅴ部では、A 集落で暮らすひとりの女性の生活の変遷を通して、限界集落の変容のプロセスとその実態をみている。最終章で全体の総括をし、過疎化と限界集落化のプロセスがどのように進んだのか、そのなかで高齢女性がどのようにして晩年を迎えようとしているのか、そこに生じる生活課題を解決する術はあるのか、あるとしたらどのような術かを提示しようとしている。

調査地として選定した高知県の中山間地域は、高度経済成長期の産業化によって産業構造を大きく変化させた地域である。若年層を中心とした都市への人口移動のために過疎化がすすみ、跡継ぎを確保できなかった家の継承システムは崩壊した。そして、集落内の互助関係も近隣ネットワークの中心にいた人たち失うことによって限界化していった。仁淀川町では、9 世帯以下の小規模集落が全体の 4 割を超え、その多くの集落が近隣同士で助け合うことができない限界集落である。このような地域のひとつを調査地と定めたことは研究の独自性を高め、研究を成功させる重要な条件となった。

本研究の特徴は、中山間地域が社会・経済変動にともなって過疎化・限界集落化する過程を、そこに生きる高齢女性の人生の移行と生活の変遷によって把握しようとしている点にある。加えて限界集落の最終局面を迎えた集落がどのようにして終盤を迎えるのかという問題を、そこに住む独居高齢者の日常生活の実態と経年変化を詳細に追って予測しようとした点に本研究の独自性がある。

中山間地の過疎化のプロセスに関して明らかになった主な点は以下の通りである。

① 【T 地域の過疎化と限界集落化の過去から現在までのプロセス】

高度経済成長期に若年層が流出し、集落は人口の再生産機能を失い、高齢化率が 100%に達した 2000 年以降、再び人口減少が始まり、その過程で近隣ネットワークの中心にいる人たちを失うことによって集落は限界化していった。

② 【別居隠居制をとる地方で家族の継承ができなくなった経緯】

高度経済成長期に、都市部で教育機会や仕事を得た子ども世代は地域外に就職し家庭を築いた結果、夫婦はアトツギを確保できず、別居隠居制は崩れ、代々継承されてきた山林田畑や家産は継承者を失った。

③ 【過疎化する集落の高齢女性の生活を支えているもの】

家族・親族や近隣、そして公的機関のソーシャルサポートによって生活は支えられているが、サポート資源が多様であるかどうかは、集落の環境条件が影響している。限界集落である A 集落では近隣サポートが得られず、早い段階で別居子の定期的な生活支援を受けている。

④ 【過疎化する集落の高齢女性の QOL が、どのような要因に規定されているか】生涯を農業に従事してきた「農民型」の女性は、体力的にも農作業ができるほどに健康で自立しており、農作業が主観的 QOL を高めている。しかし、二次的社会化の時期も閉じられた社会で過ごし、日常的に交際習慣がないため、高齢期のサポート資源は親族内に限定されている。一方、非農家の「非農民型」女性は、高齢期のサポート源を主体的に選択して生活を維持するため、サポートの状態が主観的 QOL に影響している。

⑤ 【過疎化する集落の高齢者、とくに限界集落の高齢者はどのようなプロセスを経て最期を迎えるのか】最終局面の生活形態は、自立できている段階の生活形態である程度推測できることを示した。限界集落の二人は、近隣サポー

トが見込めず、地理的条件が影響してフォーマルサポートも回数制限があるため、近いうちに他出せざるをえないことが予測できる。

審査ではつぎのような意見が出された。まず再考すべき点である。分析軸がいまひとつ定まっていなかったために、過疎化のプロセスよりも今の問題に関心が流れてしまい趣旨の一貫性が弱まってしまっている。高齢女性の語りにはリアリティがありそこに多くの重要な意味が込められていて興味深い結果になっているが、それを引き出し記述することに必ずしも成功しているとはいえない点が惜しまれる。語りを丁寧に見ていくことに専念した方がよかったのではないか。このように論文構成や焦点の当て方等に改善すべき点があるが、その一方で、過疎が進む集落に入って高齢単身者の調査を繰り返し実施して得た豊富な資料には十分に価値がある。集落が真に限界に達している地点を、女性高齢者の聞き取りによって捉えようとしている点は評価できる。女性たちの聞き取りを中心に展開している部分は労作とあってよい水準であり、社会経済変動に伴う地域変動を受けて女性たちの暮らしがどのように変わってきたのか、それがまた地域を変えてきた様を明らかにしている。

以上から、本論文は、審査委員全員の意見として、優秀な博士論文として採択し、合格とする。

関連論文（すべて査読のある雑誌）

① 著者氏名：武村由美

論文題目：限界集落の後期高齢女性の生活実態—地形・集落の状況とソーシャルサポートが及ぼす影響を中心に—

学術雑誌名：生活経営学研究

巻・号・頁：No.52,pp.39-48

発行年月日：2017年3月

② 著者氏名：武村由美

論文題目：限界集落化の過程と直面する課題—高知県仁淀川町（旧仁淀村）を事例に—

学術雑誌名：高知工科大学紀要

巻・号・頁：第14巻

発行年月日：2017年7月